

テーマ1 「観光振興」

参加地方政府	中 国：河南省、陝西省、成都市、洛陽市、宿州市、臨沂市 インドネシア：西ジャワ州 マレーシア：マラッカ州 韓 国：忠清南道、慶尚北道 日 本：福島県、山梨県、岐阜県、静岡県、三重県、和歌山県、 鳥取県、島根県、香川県、高知県、熊本県、奈良県、 高山市、奈良市、橿原市、御所市、葛城市、三宅町、 明日香村、広陵町、下市町
関係機関等	国連世界観光機関（UNWTO）駐日事務所、東アジア・アセアン経済研究センター（ERIA）、日本貿易振興機構（JETRO）、国際協力機構（JICA）、日本国際問題研究所（JIJA）、関西広域連合、近畿大学、木津川市
講 師	藻谷 浩介（株）日本総合研究所主席研究員

講師スピーチ



藻谷 浩介（株）日本総合研究所主席研究員

地方政府が観光に取り組むのは、観光客を増やして地域が賑わうことだけが目標ではない。それによって、さらに自分たちの地域の経済を活性化するためである。

地域の活性化には、5つの段階がある。知名度、集客、売上、利益、それぞれの増加が、はじめの4つの段階である。観光を行う企業であればこれで十分だが、地方政府の場合は、その上にある5つ目の増加を目指さなければ効果がない。それが地域内経済循環拡大で

あり、言い換えれば、地消地産である。地元で観光客が消費するものに、できる限り地元産品を使用する。地元産品の使用が拡大すればするほど、地域に落ちる付加価値が増え、ここまでやって、初めて地域の活性化と言える。

日本の観光の現状を延べ宿泊者数から見ると、外国からの観光客数は大きく増えているが、国内観光客数はほとんど増えていない。韓国も概ね同じ状況であり、中国はまだ先だが、やがて同じ状況になると思われる。インドネシアでも、経済が発展した30～40年後には、同じことが起こる可能性がある。

東南アジアを含む東アジアは、人口が約23億人に上り、世界の3人に1人が暮らす大規模なマーケットを持っている。この点で、観光振興において、東アジアは非常に有利な地域だと言える。去年のデータでは、日本への観光客は中国と韓国が多く、次にアメリカが続いた。タイの観光客も急速に増えており、さらにオーストラリア、フィリピン、マレーシア、シンガポール、インドネシア等の観光客も増えてきている。

一方、日本人の国内観光客の宿泊先を都道府県別に見ると、大阪や京都が近隣に位置することもあり、奈良県は最も日本人の宿泊者数が少ない。しかしながら、奈良県に宿泊する外国人の観光客数は爆発的な成長を遂げている。日本人には分からない奈良の良さ、朝の静かな街や夕暮れの美しさ等の、泊まってこそわかる価値が、外国人観光客から大きな評価を得ているのだろう。

本日参加の各県はじめ、日本の多くの地方政府で外国人観光客数が急増している。中でも、東京、大阪、北海道といったトップ10の地域では、その増加率は桁外れで、もはや東京の経済を支えているのは、過去8年間で3倍に増えた外国人観光客であると言っても過言ではない。これら日本への外国人観光客の数は、今後も増えていくと見られるが、これからの日本における観光の課題は、増加する観光客それぞれにいかに関心を持っていただくか、また、いかにそれをセールスの増加に結びつけていくかということである。

北海道の小樽市の人口は、過去30年間で18万人から12万人に減少した。多くの観光客が訪れているが、人口増加や地域の活性化になかなか結びついていない状況がある。一方、小樽から50キロ程度しか離れていない、大変有名なスキーリゾート地のニセコでは全く状況が異なる。町内産品の使用を推奨するなど、地域内経済循環拡大を明確に意識することで、人口が増加している。

観光地がサスティナブルに自立できるには、3つのポイントがある。まず、観光地として明確なポジショニングを持ち、観光客が繰り返し行きたくなる目的と理由を有すること、次に、長く滞在したくなる時間消費メニューを年々増やすこと、そして最後に、すべてにおいて地消地産を進めていくことである。これらの試みにより、観光は確実に地域の活性化につながっていくだろう。

関係機関プレゼンテーション



国連世界観光機関（UNWTO）駐日事務所

持続可能な観光の実現に向けた取り組みを推進

東アジアは、今や国際観光の成長エンジンとなっており、地域内の各地が高い競争力を持っている。その中で日本は、明確なビジョンと強いリーダーシップのもと、政府一体・官民一体となって観光政策を推進し、成果をあげている。

一方、環境汚染の深刻化等、オーバーツーリズムの問題が生じており、今後取り組むべき課題は、持続可能な観光の実現だと考えている。

国連世界観光機関（UNWTO）では、独自に開発した指標に基づき、世界27地点の観光地でモニタリングを行うとともに、そのネットワーク化を進めるINSTO（The UNWTO International Network of Sustainable Tourism Observatories）に取り組んでいる。

事例紹介



インドネシア・西ジャワ州

観光振興においてデジタルテクノロジーを積極的に活用

インドネシアでは携帯電話の保有台数が人口を凌駕しており、デジタルテクノロジーの活用は観光振興において非常に重要である。

西ジャワ州は、YouTube等を活用したデジタルプロモーションやデジタルマーケティングを積極的に行っているほか、観光産業での問題の特定やニーズの把握のために、ビッグデータの活用も進めている。

また、デジタル技術の進歩により、ホテルではなく一般家庭に宿泊し、地元の人々とのローカルな交流を楽しんでいたくなど、地域コミュニティを巻き込んだインクルーシブ・ツーリズムにも取り組んでいる。



中国・成都市

美しく暮らしやすいガーデンシティを目指し、グリーンロード（緑道）ネットワークの構築を推進

成都市では、道路利用者の快適性と都市全体の空間機能の向上を目指し、グリーンロードネットワークの構築を進めている。地域間の幹線道路、都市部の補助幹線道路、コミュニティ内の道路によって構成されるもので、完成後は市のほぼ全域をカバーする予定である。

グリーンロードネットワークは、環境システムの保護、スロー交通や観光・レジャー活動、各種文化イベントの開催等を促し、災害時の緊急避難場所としても機能する。

先行モデル地区では、大型グリーンパークやサービススポットの整備を予定しており、一層の景観向上を図るとともに、住民や観光客の多様なニーズに対応をしていきたい。

意見交換の内容

1. 多様なコンテンツによる地域の魅力向上や人材育成

(1)地域の魅力向上や新たな観光コンテンツの発掘・創出

- 観光客を増やし、所得を増加させるためには、魅力的なコンテンツがなければならない。一度来訪しただけで終わってしまうのではなく、リピーターとなってもらうために、魅力的なコンテンツをどのようにつくっていくかが忠清南道においても重要な課題となっている。
(韓国・忠清南道)
- 洛陽市は、中国の古都として、文化の要素を前面に出した観光振興を進めている。龍門石窟等の旧跡を有する特徴を活かし、隋唐洛陽城国家歴史文化公園を建設するなど、貴重な歴史資源を観光資源に変える取り組みに力を注いでいる。都市の文化・文明とエコ文明との融和、現代のものと伝統的なものとの融和を促し、古都の新しい姿を打ち出していきたいと考えている。
(中国・洛陽市)
- 西ジャワ州では、新しい観光名所やコンテンツを毎年開発・創出することをミッションとしている。例えば、3年前にフローティング・マーケットをつくっており、現在は、バンドン市内にアジア・アフリカ村を建設中である。今あるものだけではなく、新しいコンテンツやディステーション（目的地）を創出することにより、リピーターを獲得していけると考えている。
(インドネシア・西ジャワ州)
- 福島県では、東日本大震災後、一時は観光客（入込）数が大幅に落ち込んだが、2018年には震災前の約98.5%まで回復した。
福島県は、雄大な自然の恵みを受け、多くの登山や紅葉の名所があり、農業等も盛んで福島ならではのグルメを楽しめる。また、日本酒も高い評価を得ている。戊辰戦争の舞台として、会津若松や鶴ヶ城等、歴史を肌で感じていただける名所・施設も数多い。
今後も様々な主体と協力して、効果的な施策を多角的に展開し、福島の観光振興、ひいては復興につなげていきたいと考えている。
(日本・福島県)
- 旅行や食べ物にお金を費やすのは、幸福になりたいということの表れに他ならない。幸福のニーズをとらえ、これをいかに観光客の具体的な行動として経済の振興につなげていくかが課題である。国民の多くがイスラム教徒であるインドネシアでは、定年後の高齢者が宗教知識や宗教建築に親しむ、宗教ツーリズムが生まれており、幸福のニーズを満たす新たな観光の形と言えるだろう。
(インドネシア・西ジャワ州)

(2)デジタルテクノロジーを活用したアプローチ、インクルーシブ・ツーリズム

- 幸福の形は人によって様々なので、リサーチをかけ、それぞれのニーズを探っていくことが重要である。西ジャワ州では、インターネットやスマートフォンといったデジタルテクノロジーを活用し、全般的なマーケティングではなく、対象を絞った広告等、それぞれのライフスタイルに合わせたアプローチを行っている。
(インドネシア・西ジャワ州)

- インクルーシブ・ツーリズムを促進するため、アドバイザーチームをコミュニティに派遣し、標準的な衛生管理の方法や宿泊費用に関する知識等を地域住民に教えている。典型的なホテルに宿泊するよりも、体験型の観光を楽しみたいという観光客のニーズが増えてきており、ローカルなコミュニティで地元の生活を体験することにより、非常に感動的な経験をしていただけたと考えている。
(インドネシア・西ジャワ州)
- 新しく発展している観光地ほど、最新技術の活用等、時代への適応ができている。老舗観光地は、それらに学び、ただ史跡を見て回るのではなく、それぞれの人に違う価値を与え、楽しんでもらえるような歴史観光地になれるかが課題だと思う。
(藻谷講師)

(3)観光振興を担う人材の育成

- 地元の資源を活用した新しい観光サービスの創出、インクルーシブ・ツーリズムの促進、観光拠点の整備、投資の誘引等の取り組みを進めていく上では、新しい考えや能力を持った人材の育成・活用が重要だと考えている。
(日本・奈良県)
- バンドン市内には観光の大学がある。インドネシアでもトップレベルの大学の一つで、卒業生がホテルのスタッフ等になって働いている。また、観光業に関する学科を設けている高校もある。観光は西ジャワ州の重要な産業であり、そのための教育に力を入れている。
(インドネシア・西ジャワ州)
- (通訳案内士制度の現状に関する谷野氏からの質問に対して)日本の通訳案内士には、現在、全国通訳案内士と地域通訳案内士の二種類の資格がある。制度改正により、これら資格の保有者でなくとも、それぞれの知識や経験を踏まえてガイドができるようになった。門戸が広がった一方で、ガイドの内容や知識のレベルアップ等、質の向上が今後の課題だと言える。
(国連世界観光機関駐日事務所)

2. 外国人観光客増加への対策や戦略的な誘客促進

(1)外国人観光客増加への対策

- 観光地は国内のみならず、国際的な競争にもさらされている。観光客の数で競い合っているが、いかに観光地の質を上げていくかに注力すべきかと思う。また、観光を通じた観光客の質の向上や、競争の中で地域の可能性をどのように発掘していくかが課題だと考えている。
(マレーシア・マラッカ州)
- 2018年に韓国から日本を訪れた観光客は約700万人だったが、日本から韓国を訪れた観光客数は、様々な対策を行っているにも関わらず、おおよそ半分の約300万人にとどまった。相互の往来を増やすために、さらなる政策的な配慮が必要だと考えている。
(韓国・慶尚北道)
- 観光客には二通りあると思う。一つはごく標準的な観光客で、もう一つは、戦略的な観光客である。戦略的な観光客は、一度来訪して次に来るときには、より多くの恩恵をもたらしてくれる。国際的コンベンション等を積極的に行い、長期的な目線で見、西ジャワ州への投資家や協力者になってくれる人を増やし、国際観光の推進に努めたい。
(インドネシア・西ジャワ州)

(2) MICE(Meeting, Incentive Travel, Convention, Exhibition/Event)誘致やIR(Integrated Resort)の開発等、戦略的な誘客促進

- UNWTOでは、持続可能な観光の実現に取り組まれているが、その中で、MICE誘致やIRの開発についてはどのように位置づけられているのか伺いたい。(日本国際問題研究所)
- コンベンションを含むMICEの誘致、また、昨今脚光を浴びているIRは、いずれも重要な観光要素だと考えている。日本における国際会議の開催件数は順調に増えており、本日参加の各地方政府でも、MICEの誘致に注力されていると思う。その分、国際競争も厳しくなっていると認識している。IRについては、日本では政府の方針が固まり、具体的な立地が決まっていく段階に差し掛かっているため、今後の展開に非常に注目しているところである。(国連世界観光機関駐日事務所)
- MICEやIRを呼んでくること自体は可能でも、それが地域の活性化につながるどころと、つながらないところがあるように思う。IRやコンベンションで消費される食材を地元産にしているか、また、そこで働く人材を地元で教育して生み出していけるかということが重要であり、地方政府は単に客数や売上、利益が増えるということだけではなく、地域内経済循環が拡大するかどうかを考えなければならない。(藻谷講師)



3. 東アジアにおける観光振興のこれから

(1) 地域開発と地域のアイデンティティーの確保

- 成都市から西安市まで高速鉄道が開通し、二市間のアクセスが非常によくなっている。また、途中地点にある重慶市もその恩恵を受けて、非常に賑わっている。高速鉄道により、四川省内はもちろん、北京・広州・上海等、国内各都市へも、非常に良いアクセス環境が整ってきており、交通の点で成都市は非常に発展の速い都市になっている。(中国・成都市)
- 都市化が進むことと地域のアイデンティティーが薄まっていくことは、表裏の関係にあり、世界中の地方政府に共通の課題だと思う。まちが発展していくことに伴って、失われつつある地域の文化や伝統をどのように維持し、両立を図ろうとしているのか、他の地方政府の考えを伺いたい。(日本・奈良市)
- 成都市では、ガーデンシティの建設において、カントリー観光等、農村や郊外の振興にも注力している。成都市には古くからの鎮(≒町)もあり、その歴史と遺跡を活用して、それぞれに特徴ある鎮を作り上げていくという計画もある。都市と農村のバランスの取れた発展を目指している。(中国・成都市)

- 経済面に加え、社会の結束力、アイデンティティーをつくる素になるという意味でも、観光の発展が、国のみならず地域の発展にとって重要な力であると、本日の議論を通じて改めて確認できたと感じている。 (日本・奈良県)

(2)持続可能な観光の実現

- UNWTOから発表のあった「持続可能な観光指標」というのは、特定の項目が決まっており、数値化されているものなのか。また、具体的にはどのような指標があるのか。 (近畿大学)
- 「持続可能な観光指標」には複数のモデルがあり、どのモデルにおいても分野別の指標項目を定め、それぞれ基本的には数値で評価するという仕組みになっている。評価自体は、観光地の地方政府等が行っている場合がほとんどである。具体的な項目は指標ごとに少し異なるが、観光客数や経済効果等、主に観光活動の実態を表すもの、また、環境要件として、水質や空気の汚染状況等を取り上げることが多い。 (国連世界観光機関駐日事務所)
- UNWTOと国際協力機構(JICA)では、2011年から2016年までの5年間で、開発金融機関や国連の組織、また、2国間の援助機関によって実施された、208の観光セクターのプロジェクトをサンプルとして、共同調査を実施した。その結果、SDGs(持続可能な開発目標)の17のゴール全てに観光プロジェクトが貢献しており、特に、ゴール1の貧困撲滅、ゴール8の働きがい、ゴール17のパートナーシップには、高い貢献をしていることがわかった。SDGsは世界共通の課題だが、技術や資金、経験に乏しい途上国にとっては大変なチャレンジとなるため、JICAは様々なステークホルダーと協力しながら、これからも途上国のSDGsへのチャレンジを支援していきたいと考えている。 (国際協力機構)

(3)東アジアの連携のあり方

- 東アジア地域包括的経済連携(RCEP)といった地域同士の枠組みも活用して、東アジア全体の観光客の往来や交流を深めていくのもよいのではないかと。 (韓国・忠清南道)
- グローバル化やデジタル技術の進歩により、様々な地域の伝統文化や歴史に触れることができるようになり、東アジアは、今、幸せな時間を迎えていると思う。観光の力でどのように東アジア発展のモデルをつくっていくか。このような課題について、本会合が学び合いのプラットフォームとして、今後も少しでも貢献していくことができると考えている。 (日本・奈良県)
- UNWTOの「持続可能な観光指標」のように、東アジアの観光の指標をKPI(Key Performance Indicator)として共有することはできないだろうか。東アジア全体の観光指標となると、非常に規模の大きな話になるので、例えば、本会合に参加している地域の観光KPIを整備して、互いに学び合うための素材にできないかと考えている。 (日本・奈良県)

総 括



藻谷 浩介 (株)日本総合研究所 主席研究員

東アジア・東南アジアにおいては、国ごとに多様な文化・歴史を持っており、それぞれに深い誇りがある。また、各国内においても、地域ごとに非常に深い歴史・文化があり、やはりそれぞれに深い誇りがある。

アメリカやヨーロッパ、アフリカと比べても、アジアには、より深く、より多様な文化を有するという特徴があると思う。長い歴史を通じて保持し続けてきた、これらの多様な文化を活用することで、アジア地域は、より多くの、また、より多様な幸せに奉仕することができるだろう。

観光は、それぞれの人に、それぞれに違う幸せを与える産業とすることができ、その意味で市場に限界はない。観光は、お金の奪い合いではなく、いわば幸せの与え合いであり、互いの文化を尊重し、学び合う契機になるという点でも、非常に重要な産業と言える。

東南アジアでは、人口増加が続いている国も多い。豊かになる人が増えれば増えるほど、観光地は混雑し、そのマネジメントは大変難しくなる。この点については、今後も先進地域である日本、中国、韓国に学んでいただければと思う。

本会合での出会いをきっかけに、他の地方政府等との交流を深めているという発表もあった。参加者の皆様には、ぜひこの機会にさらに交流を深めて、互いの多様な文化・歴史・誇りへのリスペクトに溢れた豊かな東アジアをつくっていただきたいと思います。

